

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：32686
 研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2012～2014
 課題番号：24520266
 研究課題名(和文) 南北戦争と大衆詩の応砲 讃歌・式典詩の社会的機能から音楽・美術への文化的影響まで

 研究課題名(英文) Popular Poetry Aroused by the Civil War: From Its Function of Solidarity to Its Influence on Music and Art

 研究代表者
 澤入 要仁 (SAWAIRI, Yoji)

 立教大学・文学部・教授

 研究者番号：20261539

 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：南北戦争が起こるとアメリカの大衆詩人たちは果敢に反応した。彼らは愛国心や哀悼など、戦争のあらゆる面をうたった。その多くは戦意昂揚をはじめとした素朴な感情を単純にうたったものだったが、詳しく検討すると、たくみな表現によって複雑な機能を果たす作品も少なくなかった。たとえば勇猛な老婆の物語「バーバラ・フリーチー」は戦中に書かれた詩でありながら、すでに戦後の和解や平和を示唆していた。南軍兵士が憂さ晴らしにうたう戯れ歌「あの喇叭卒」は、その卑俗な笑いによって、部隊の団結や死への覚悟を導く仕掛けになっていた。大衆詩はその表面的な分かりやすさの背後に、多層的・多義的な意味を秘めていたのである。

研究成果の概要(英文)：When the Civil War broke out, popular poets in America stood up to sing. They rendered almost all the aspects of the war including bravery and mourning. Although many of their poems were a simple expression of ingenuous feelings, artless in style and naive in sentiment, this study shows that some verse carry out complex functions in ingenious depiction. For instance, "Barbara Frietchie," a poem written during the war about a fearless old woman defying an enemy force, is not just a morale-boosting portrayal but suggests even a mutual reconciliation and postwar peace. "That Bugler," though being a Southern comic song in which soldiers make a loud complaint about their prevailing bugler, also functions to strengthen their unity as a corps and prepare them for an honorable death. Popular poems, even those of the Civil War, contained multi-layered meanings beneath the surface of straightforward text.

研究分野：アメリカ詩

キーワード：大衆詩 南北戦争 ジョン・グリーンリーフ・ホイットティア ジェイムズ・ラッセル・ローウェル ユーモア詩 式典詩 ストーンウォール・ジャクソン ワシントン砲兵隊

1. 研究開始当初の背景

アメリカの19世紀は、おそらくもっとも詩が書かれ、出版され、読まれた時代だった。アメリカ史最大の試練といえる南北戦争が起こったのは、その19世紀である。

詩人たちは、この戦争に対していわば詩作で応答した。有名な Whitman や Melville だけでなく、現在では忘れられがちな大衆詩人たちも果敢に作品を発表した。彼らは戦意高揚の讃歌、戦闘を伝えるバラッド、兵士と女性のロマンス、死者を悼む哀歌、記念行事で朗唱する式典詩など多様な形式を使って、戦争のあらゆる面を歌った。それらの中には軍歌や歌曲として歌われたり、イラストレーションが付されたりするものも多かった。

これまで研究者たちは19世紀アメリカの大衆詩を通俗的、感傷的、教訓的とみなして軽視してきた。現代でも、Angela Sorby などによる「教室詩人」研究や、Paula Bernat Bennett らの女性詩人研究という一部の例外を除いて、本格的な研究は少ない。

南北戦争と大衆詩の関係を扱った研究となると、さらに限られる。Whitman や Melville の戦争詩に関する研究は多いが、広く読まれた大衆詩は等閑視されてきたからだ。J. D. McClatchy の新しい南北戦争詩アンソロジーも有益だが、やはり Whitman らの詩が多くを占め、たとえば数種類のメロディが付されて歌われた Theodore Tilton の“God Save the Nation”すら含まれていない。

2. 研究の目的

南北戦争は多くの大衆詩を生んだ。それらは広く愛唱され、市民や兵士の日常の一部になった。そこで本研究は、南北戦争を歌った大衆詩を以下の観点から考察することを目的とした。

まず、John Greenleaf Whittier や Theodore Tilton ら有名無名の大衆詩人たちによる作品を掘り出しながら、それらが讃歌、バラッド、式典詩などの多様な形式をどのように使い、大義(連邦回復や抵抗の権利)、戦闘、死、銃後の生活などのテーマをどのように歌っていたのか、その成立の背景を視野に入れながら分析する。

第二に、それらに基づいて作られた歌曲やイラストレーションを探り出しながら、大衆詩がアメリカ文化の中でどのように受容され、戦時社会の中でどのような機能(戦意高揚、報道、哀悼、喪など)を果たしたのかを解明する。以上の両方向の研究によって、小説やジャーナリズムとはちがう、大衆詩固有の意義や真価、さらにはその限界を示そうとした。

以上のような目的によって本研究は次のように特徴づけられるといえる。まず、南北戦争を描いた『赤い武功章』のような小説でもなく、Melville などの有名な戦争詩でもなく、軽視されがちな大衆詩人による南北戦争作品を取り上げること。したがって、いまや

忘れられた詩や音楽・美術を再発見し、その真価を判定することがひとつの特徴である。さらに大衆詩が戦時の市民・軍人に及ぼした影響や、その反対に、戦争が大衆詩に及ぼした影響をそれぞれ解明しようとしたことも特徴となっている。すなわち本研究の広い目的をいえば、アメリカ文学史や南北戦争史のみならず、アメリカ文化史にも、ひとつの新しい重要なページを提供することといえる。

3. 研究の方法

本研究は以下のような方法とステージで行われた。

まず、南北戦争を直接、あるいは間接的に歌った大衆詩を基礎資料として集めた。その際、コレクションや書誌を参照することから始めたが、Whitman や Melville の戦争詩とは違って、大衆詩となると、その論者がきわめて限られるため国内外のアーカイヴズを探る必要があった。

第二に、詩人たちが素材にした具体的な事件(戦闘や出征、戦死など)が分かるものは、それらについて史実や報道を調査した。南北戦争事典などの関連図書を使って、その事件や逸話の概要を集めるだけでなく、当時の新聞雑誌も探り、同時代の報道を確認する必要があった。事実や報道と対比することによって詩人の表現の工夫が明らかにするためである。

第三には、それらの大衆詩を受容した作曲家や歌手、イラストレータの作品を探った。Tilton や Randall の歌曲だけでなく、George Frederick Root や Henry Clay Work ら、ふつう音楽家に分類される作家の調査を行った。彼らは作曲だけでなく作詞も行っていたため、彼らの歌詞も大衆詩と考えられるからだ。さらにイラストレーションに関しても、広く調査した。たとえば、当時は精緻な木口木版術による挿絵が発達して普及しただけでなく、Currier and Ives 社などのカラー・リソグラフによる商業美術もさかんに摺られた時代だったからである。

第四として、これまで考察した詩作やその受容の果たした役割を検討し、大衆詩というジャンルの意義に光を当てた。たとえば大衆詩のバラッドは、原始的なジャーナリズムでもあった。軍歌は戦意高揚に貢献した。哀悼歌は、個人の悲しみを社会に共有させることによって、個人の悲しみを軽減させる効果があった。このような大衆詩のもった効果を再考することによって、大衆詩の意義に新しい光を当てた。そのさい、小説などの形式との対比も有効に利用した。

4. 研究成果

本研究の成果は大きく三種類に分けられる。

(1) しばしば大衆詩は、伝統的なバラッドのごとく、史実に記録されていないような小さな事件をうたう。それはバラッドと同じよう

に、ささいな事件にゆたかな表現を与えることによって、それを生きながらえさせる。詩の記述が真実として信じられるようになるからだ。しかし、その大衆詩がどれくらい事実を描いているのか、どれくらい虚構を含んでいるのか、もはや学術的に検証することは難しい。したがって、まずは知られている史実の範囲を明らかにし、それ以上は史実か否かを探るのではなく、その詩テキストが何をどのように描いているのかを謙虚に探ることが重要になる。

たとえば、戦中に書かれ人口に膾炙したジョン・グリーンリーフ・ホイットリアの詩「バーバラ・フリーチー」(1863)を詳しく調査してみた。これは、南軍の名将“ストーンウォール”・ジャクソンひきいる部隊がメリーランド州フレデリックを通過したとき、北部連邦の旗である星条旗をふってジャクソンを挑発した(とされる)老婦人フリーチーの物語だ。史実をどう探ってみても、もはやフリーチーの行動は実証できない。しかし、そのような行動が起こりうる気運があったことは史実によって示されている。

以上の史実を確認し、そこからはこの詩を細かく分析することによって、以下のことを詳らにした。まず、この詩が戦時中に書かれた愛国的な戦争詩であるにもかかわらず、同時に、戦争終結後の平和な世界もうたっていたことである。指揮官と彼を挑発した老女とは敵同士でありながら、和解の兆しも描かれていたのである。さらに、敵対した老女と指揮官が同じ死によってひとつになることは、終戦後、ひとつの国家による鎮魂や追悼の必要性も示唆していた。

すなわち、この詩は戦中に書かれたものの、戦意を鼓舞するような戦争詩でも、武力行使を批判する反戦歌でもない。そうではなく、次の世に来たるべき平和を祈った歌になっていた。愛国心をたたえた戦争詩でありながら、同時に平和を願う詩になっているという、この矛盾した両面性がこの詩の魅力になっている。

詩「バーバラ・フリーチー」は、初めて雑誌に掲載された直後から、各地の新聞に転載されていたことが明らかになった。面白いことに、南部の新聞も掲載し、この詩を批判すると同時にその影響を危惧していた。南部は詩の力を怖れていたのである。詩が一定の武力に相当する力を発揮すると考えていたのである。それは事実を描いているかどうかは問題ないことだった。

(2) 大衆詩は奇抜なこと、突飛なことをうたうことができない。それでは大衆がついてこないからだ。つまり大衆詩は、大衆に寄り添わなければならない、その結果、しばしば陳腐なことを繰り返すたわざるをえない。大衆詩が現代の研究者からしばしば軽視される所以である。

大衆詩のなかで、そのような制限がもっと

も大きいのが式典詩だ。というのは歌うべきことがあらかじめ決まっていて、斬新なことを斬新にうたうことなどまったく許されていないからである。南北戦争は多くの式典詩を生んだ。それらは戦争の大義を勇猛にうたった大衆詩よりも、いっそう論じられることが少ない。

そこで北部の詩人 James Russell Lowell がハーヴァード大学の戦没卒業生を追悼した式典で詠んだ“Ode Recited at the Harvard Commemoration” (1865)および、南部の詩人 Henry Timrod がチャールストンのマグノリア墓地で開催された戦没者記念式典でうたった“Ode Sung on the Occasion of Decorating the Graves of the Confederate Dead”(1866)を詳しく検討した。たしかに、いずれも無名の詩人の無名の作品というわけではない。しかし、いずれも詩人みずから式典の聴衆の前で朗詠した occasional poem であることを考えれば、本研究が対象としてきた大衆詩と呼ぶうる公共性を十分にもっていたといえる。

けれども、これらの詩を分析すると詩人の戦略が明らかになった。たとえばローウェルは、いったん詩人と兵士たちを並べることによって、聴衆たちに兵士たちとの一体感を抱かせたのち、すぐさま兵士たちが詩人とは異次元の英雄であることを示すことによって、聴衆たちに兵士たちの偉大さを悟らせた。このように聴衆たちの心理に合わせるだけでなく、ときにそれを裏切りながら、刻一刻と展開させていたのである。そうすることによって詩人は「人々と韻律を合わせ」ていたのである。大衆詩の重要な醍醐味はこのような聴衆・読者とともたゆたうことであったことが明らかになった。

(3) 大衆詩はおのずと文学の範囲を逸脱しようとする。たとえばそれはメロディを付されて歌になる。あるいはイラストレーションに描かれ視覚イメージとなる。そのような自由な逸脱が大衆詩の大きな特徴の一つである。

そこでたとえば南軍のユーモア詩「あの喇叭卒」を分析した。その最大の理由は、この詩が歌としてうたわれただけでなく、自由や共和国といった高尚な理念をうたった北軍の「自由の雄叫び」や「リパブリック讃歌」などとちがって、無名の兵士が従軍生活の日常をうたった卑俗な詩であったからだ。

まず、この詩の作者と伝えられる A. G. Knight について、南軍の従軍兵名簿や、ローカル新聞の死亡記事などを利用して調査した。その結果、正確な名前は Alfred George Knight といい、1819年、イギリスに生まれ、ニューオリンズでペンキ屋を営んでいた1861年、砲兵隊に入隊ののち、1870年、心臓病により没した経歴が明らかになった。おそらく文学の素養のない無名の詩人だった。

さらに詩「あの喇叭卒」を分析した結果、以下のことが詳らになった。この詩は、残

酷なまでに厳格な喇叭卒に苦しめられるユーモラスな内容になっているのだが、けっして従軍生活を恨む詩にはなっていない。なぜなら、その喇叭卒を兵士たち共通の敵にすることによって、部隊の中に一体感を生みだしているからだ。詩の中では、その逆説的な仕組みが「あの」という指示形容詞によって巧みに表されていた。それは、「またあの」という、繰り返される怒りを表し、さらには、「あの」というだけで兵士たちに通じる共通の敵になっていたからである。すなわち、この詩はユーモア詩であるだけでなく、部隊の戦意高揚にも貢献していたのである。卑俗に聞こえるユーモア詩が戦闘に役立つ軍歌になっていたのである。これは大衆詩ならではの機能と思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

澤入要仁、指揮官と老女 「バーバラ・フリーチャー」を読む、国際文化研究科論集、査読有、21 巻、2013、83-97

澤入要仁、『ラパチャーニの娘 ナサニエル・ホーソン短編集』評、東北アメリカ文学研究、査読無、37 巻、2013、141-144

澤入要仁、ユーモアの機能 南北戦争の歌「あの喇叭卒」と兵士たち、国際文化研究科論集、査読有、20 巻、2012、29-43

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

澤入 要仁 (SAWAIRI, Yoji)
立教大学・文学部・教授
研究者番号：20261539

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：